

人文科学研究所 研究報告会

日時:2024年11月30日(土)13:00~15:20

会場:オンライン(Zoom)開催 ※聴講自由

Zoom 参加を希望される方は、①所属、②氏名、③メールアドレスをご記入の上、人文科学研究所 (jinbunken@ic.daito.ac.jp) まで申し込みください。後日招待リンクをお送りいたします。

◆報告 1 13:05~13:35

題目:学校と学問共同体に同時に参加する教育実習の未来像

—異文化体験を経て教員をケアする共同体を立ち上げた学生の語り—

報告者:田尻敦子・今井崇恵／学びと育ちの共同体班(代表:田尻敦子)

現在、教員の多忙化と教員不足の悪循環が指摘されている。教育実習を経験した若者達が、「教員ひとりひとりを幸せにしよう」と創設したティーチャージェットは、いかにして立ち上げられたのだろうか。創設者ら十数人へのインタビューから、海外体験を経た後の教育実習が日本の教職のあり方を問い直すことにどのように影響を与えたのかを探究する。

◆報告 2 13:40~14:10

題目:〈道〉は会意字か？

報告者:亀澤孝幸／東アジア美学史研究班(代表:河内利治)

『説文』は〈道〉字を〈辵〉と〈首〉とに従う会意字と説く。〈辵〉は道路を進むことをあらわす意符であることは明白であるが、〈首〉が何を意味するのか『説文』は説明していない。しかし、甲骨文に見える〈首〉字の用例を検討すると、同字が仮借字として、すなわち表音的用法として、〈道〉をあらわしていた可能性が浮かび上がる。ここから〈道〉は会意字ではなく、形声字であることを論じる。

◆報告 3 14:15~14:45

題目:森鷗外とドイツの貴族文化 —『文づかひ』の背景—

報告者:美留町義雄／日本文学における歴史的事象の研究班(代表:美留町義雄)

森鷗外は、ドイツ留学時代に、ザクセン王国の王族や貴族に接する機会に恵まれている。彼が留学した 1880 年代は、ヨーロッパの宮廷文化が、かろうじてその体裁を保っていた時代であった。

本発表では、鷗外の小説『文づかひ』における宮廷文化、特に舞踏会の描写を対象とし、ヒロインの個性的な人物像について、鷗外の実体験と当時の歴史的な文脈から論じたい。

◆報告 4 14:50~15:20

題目:『徒然草』翻訳攷 —近代以降の翻訳書目、研究史を中心に—

報告者:小枝駿／近世絵入り本の研究班(代表:徳植俊之)

『徒然草』は現在までに多数の言語で翻訳されてきたが、国内の翻訳研究は十分に進展しておらず、その基盤となる翻訳書目や研究史もまた包括的に整理されてこなかった。本報告では、近代以降の『徒然草』翻訳書目と国内における翻訳研究史を可能な限り網羅的に整理・分析し、『徒然草』翻訳研究の全体像を明らかにしたい。